

<2025年度 第1回定例研究会>

エイジ・フレンドリーな大学の 国際的潮流～地域共創の未来

講演：小川 全夫（元熊本学園大学社会福祉学部教授、九州大学名誉教授、山口大学名誉教授、敬心学園職業教育研究開発センター長、福岡アジア高齢社会デザイン協議会会長）

日 時：2025年7月17日（木）16:30～18:30

1. 講師紹介

講師の小川先生は、2005年に設立されたアクティブ・エイジング・コンソーシアム（ACAP）の初代代表であり、日米中韓をはじめ、アジア、オセアニアなどエイジングに関するグローバル・ネットワークを構築されている。また、エイジ・フレンドリー・ユニバーシティ（AFU）の国際的な推進にも造詣が深く、熊本学園大学在職中は、熊本県の社会福祉関係会議体の要職を担うなど、熊本の高齢者福祉にも精通しておられる。

2. 講演要旨

少子高齢化が加速する中、大学は今、新たな社会的役割を求められている。とりわけ地方においては、大学が多世代の交流拠点となり、地域の福祉・経済・文化の持続性を支える「共創の場」としての機能が期待されている。本研究会では、ACAPおよびAFUグローバルネットワークの活動に精通し、国際的に高齢社会と大学の未来をつなぐ研究と実践を牽引されてきた小川全夫先生（社会老年学、本学付属社会福祉研究所・嘱託研究員）をお迎えし、大学、福祉、経済、文化の垣根を超えた「エイジ・インクルーシブな社会づくり」について、熊本県や熊本市中央区の行政職員の参加も得て議論が行われた。18歳人口の減少が見込まれる中、アクティブなシニア層のニーズにこたえる熊本学園大学の新たな役割について提起がなされた。

3. 講演概要

急速に進む少子高齢化は、日本のみならずアジア太平洋地域、さらには世界各国が共有する課題である。人口構造の変化は、社会保障や労働力といった経済的基盤のみならず、地域コミュニティの在り方、教育機関の役割までも変容させつつある。なかでも地方に立地する大学には、多世代が集い、学び合い、地域の知的資源を循環させる「共創拠点」としての新たな役割が求められている。本研究会では、その国際的潮流を牽引してきた小川全夫先生の講演を通して、エイジングと高等教育をめぐ

る最新の知見と課題について議論が深められた。

小川先生は、2005年に福岡市で誕生したACAPの初代代表として、日米中韓をはじめとする国際ネットワークを構築してきた。ACAPは、高齢社会の政策・研究・実践を多国間で共有する場として発展し、国際会議やスタディツアー、オンラインウェビナーなど、多様な協働を継続している。また、AFUを推進する国際的ネットワークとも連携し、高齢者の学びの保障、生涯教育、世代間交流、多様な大学像の創出を導いてきた。これらの潮流は、すべての世代が学び続けられる「エイジ・インクルーシブな高等教育」の実現をめざすものであり、すでに欧米・アジアそして日本でも具体的な制度やキャンパス改革が進んでいる。

講演では、まず世界の老年学拠点（USC、デューク大学、ハワイ大学等）の歴史的展開を概観し、U3A（第3世代大学）等の高齢者教育の発展、そして都市・地域政策としてのエイジフレンドリー・シティの広がりへの解説があった。続いて、ACAPが福岡市やアジアの諸都市と協働してきた取り組み—介護人材育成、国際的なケア・ツーリズム、大学のサテライトキャンパス構想、エイジング・ビジネスの創出、リビングラボとしての「福岡100」など—を具体的に示され、人口高齢化をむしろ地域の学びと経済の循環を生み出す契機として活かす可能性が議論された。

加えて、大学と地域が連動した居住モデル（College-Linked Retirement Communities、CCRC、NORC）、キャンパスを基盤とする多世代交流の実践、ボランティア活動や文化・スポーツ参加の促進など、大学が高齢社会のプラットフォームとして果たせる多層的な役割の国内外の事例の紹介がなされた。これらの事例は、大学を「若者の学位獲得の場」から、「地域の誰もがアクセスできる知識・文化・福祉の共創拠点」へと転換する上で重要な示唆を与える。

人口減少が進む熊本県においても、アクティブな高齢者の学習・社会参加ニーズは確実に増大しており、大学には新たな受け皿としての機能強化が求められる。熊本学園大学が地域の多世代をつなぎ、福祉・経済・文化の協働を促す装置として発展するために、国際的潮流を踏まえた戦略的なキャンパスデザイン、研究・教育の再編、生涯学習の体系化などの重要性が示唆された。

高齢社会を「課題」でなく「資源と共創の機会」として捉え直し、大学が地域とともにエイジ・インクルーシブな未来を創り出すことの重要性が強調された。

なお、以下は「エイジフレンドリー大学の10原則」と「熊本学園大学へのメッセージ」である。

○エイジフレンドリー大学の10原則

- 教育および研究プログラムを含む、大学のすべての主要な活動へ的高齢者の参加を奨励すること。
- 人生の後半における個人とキャリアの発展を促進し、セカンドキャリアを追求したい人々を支援すること。
- 高齢者（早期に学校を卒業した人から修士号または博士号を取得したい人まで）の教育ニーズの範囲を認識すること。
- あらゆる年齢の学習者間での専門知識の相互共有を促進するために、世代間の学習を促進すること。
- 高齢者のオンライン教育の機会へのアクセスを拡大し、参加ルートの多様性を確保すること。

- 大学の研究課題が高齢化社会のニーズに基づいていることを確認し、高等教育が高齢者のさまざまな関心とニーズによりよく対応できる方法についての公の議論を促進すること。
- 長寿という贈り物と、高齢化が私たちの社会にもたらす複雑さと豊かさの増大について、学生の理解を深めること。
- 高齢者が大学のさまざまな健康とウェルネスプログラムとその芸術および文化活動へのアクセスを強化すること。
- 大学自身の退職者コミュニティと積極的に関与すること。
- 高齢者の利益を代表する組織との定期的な対話を確保すること。

○熊本学園大学へのメッセージ

- 大学は、「高校新卒者」だけの教育機関ではない。高齢者や留学生や職場内従業員のリカレント学習機関として機能強化必要。
- 大学は、「就業先」への斡旋だけのプレースメント機関ではない。多様なボランティア機能、イベント機能の発揮が必要。
- 大学は、「ローカル市場やナショナル市場」に貢献するだけの機関ではない。国際的なニーズに対応する協力機能発揮が必要。
- 大学は、「国内基準順守」にとどまってよい機関ではない。国際基準との調和化機能を模索し続ける必要。
- 大学は、「国内研究」の国内公表にとどまってよい機関ではない。国際的公表する情報発信機能を拡大する必要。

（研究会報告担当者：黒木邦弘）

